

類縁関係に基づく地域コミュニティに関する一考察

—— カトリック長崎教区シノドスに関するアンケートの結果を通して ——

叶 堂 隆 三
加 来 和 典

目次

はじめに

1. コミュニティの再検討—宗教コミュニティへの関心
2. 長崎のカトリック・コミュニティ
3. 信徒の信仰状況
4. 小教区の維持
5. 信徒の間の共通の絆とコミュニティの維持

はじめに

日本では、従来、コミュニティの基盤的要素に「領域性」が位置づけられ、コミュニティは地域コミュニティととらえられてきた。その一方、G. A. ヒラリーがコミュニティの要素として「領域性」「社会的相互作用」とともに指摘した住民の間の「共通の絆」については、地縁と同義とされ、十分に議論されてこなかったといえる。

今日、コミュニティ要素のうち領域性についてさまざまに再検討がなされているものの、共通の絆に関しては議論がなされないままである。

本稿では、コミュニティの要素の一つとされる共通の絆に焦点を当てることにする。まず、コミュニティの成員の間の共通の絆について再検討し、次に、事例—コミュニティの成員の間に共通の絆が存在し、領域性を基盤とする文化的コミュニティーを通して、その社会的特徴の把握をめざす。すなわち、カトリック長崎大司教区が実施した全信徒調査の結果を利用して、長崎の宗教コミュニティ（小教区、parish）に所属する信徒の間の共通の絆および小教区の維持に関する意識と活動の状況を明らかにしていく。さらに、この事例の分析を通して、コミュニティの要素の一つとされる共通の絆に対する再認識・再検討およびコミュニティ維持に及ぼすその影響に着目する必要性について議論していく。

1. コミュニティの再検討—宗教コミュニティへの関心

コミュニティは日常生活の維持や社会関係の形成の場として、多くの社会領域から期待が寄せられている。その一方で、長期にわたる機能の低下や弱体化は否定しがたい事実である。とりわけ都市社会におけるコミュニティの存続は困難を極めている。

日本において、長い間、地域コミュニティ自体として、あるいはその中心的組織として位置づけられてきたのが、町内会・自治会である。伝統的地域組織である町内会・自治会は、かつては成員性に関して地域住民（世帯）の全戸加入・強制加入が原則で、組織活動の基盤である会費を全戸から強制徴収することが一般的であった。こうして徴収した町内（自治）会費および行政からの補助金等を活動資源として、防犯から祭礼に至る地域活動の実施や関連組織である子供会から老人会までの幅広い活動を支援してきた。

しかし、町内会等への加入は任意となる傾向が高まり、加入率が減少しているのが実情である。こうした状況が進行する中で、これまで町内会・自治会が実施してきた共同活動や地域住民が果たしてきた役割・作業に関して、参加者の減少や活動・役割の見直し、さらに返上等の動きが広がっている。

コミュニティ概念の再検討—地理的領域と共通の絆

ところで、ヒラリーはコミュニティ概念の検討を通して、コミュニティの定義に多く含まれる要素として、領域性（area）・共通の絆（common ties）・社会的相互作用（social interaction）を指摘している（Hillery 1955 = 1978:314）。このうち（地理的）領域性に関しては、1980年代後半以降、多くの研究者によって再検討が行われてきた（町村：33-5）。

まず、コミュニティの広域化・ネットワーク化の傾向等が指摘され、次に、インターネット上のコミュニティを包含する研究も増加している。

その一方、共通の絆に関しては、日本では十分に検討されてきたとはいいがたい。すなわち、従来の日本社会の多くでは、地理的近接性や長い居住年数の世帯が多かったこと、職業的同一性、親族関係の重複等が見られたため、共通の絆を再検討する必要がなかったためと思われる。

しかし、都市化の展開とともに、共通の絆に焦点が当てられる研究が進んだのも事実である。すなわち、アメリカの社会学者のC. F. フィッシャーの下位文化 (subculture) によって、ネットワーク型のコミュニティ概念が提示されたことによる (Fischer 1982=2002: 278-9)。フィッシャーの下位文化は、国籍・宗教・職業あるいはライフサイクルにおける特定の段階といった共通性や趣味・疾病・性的選好・イデオロギー等の顕著な特徴を共有する人びとを結びつけるものとしている。この下位文化論を刺激の一つとして、1980年代以降の関西圏の都市をフィールドにした九州・沖縄の島嶼等の出身者の同郷集団・集住地、同郷組織、在日韓国・朝鮮人のコミュニティ研究が展開するのである。

共通の絆としての類縁関係

しかし、フィッシャーの提起した下位文化は、一定の社会領域から特定の文化内容に基づく分化に焦点を当てたものであり、一定の地理的範囲に存在するコミュニティの基盤の一つとするのには問題がある。一方、類縁 (affinity) 関係は、下位文化と同様に共通の特性や内容を包含する概念であるものの、成員の間の結びつき一関係性一に比重を置くものである。S・ラッシュは、美 (aesthetic) を類縁 (affinity) 関係の一つとして、現代におけるコミュニティの一つとして美的 (aesthetic) コミュニティが存在すると主張している (Beck, Giddens and Lash 1994=1997: 379-80)。

類縁関係としてのコミュニティにおける宗教関係

ラッシュが主張するように、この類縁関係は成員の間の統合的關係を示すのに有効なものといえよう。

さらに、コミュニティの基盤の一つである類縁関

係として、宗教を位置づけることができよう。かつて日本のコミュニティ研究において、宗教領域の分析は見落とせない事象であった。農村研究においては、伝統宗教である神道の神社 (氏子組織・まつり) ・仏教の寺院 (檀家組織) は集落や地域の研究対象であり、多くの調査結果は住民間の宗教関係がコミュニティの統合を例証するものであった。また、都市研究においてもR・P・ドーアの『都市の日本人』に代表されるように、宗教が世帯調査の主要項目とされていた (ドーア 1962: 235-287 頁)。

しかし、20世紀の世俗化の進行が急激なものであったため、コミュニティにおける宗教生活は「変容」という視点から接近するのが一般的になり、さらに世俗化が浸透していく中で、コミュニティ研究において宗教が研究対象から除外されることが一般的、当たり前になっている。

こうした状況ではあるものの、文化、とりわけ宗教が重要なコミュニティ要素であることを見落としはいけないだろう。橋爪大三郎はかみ砕いた表現で、文化 (宗教) について、次のように述べている。「宗教の役割はなにかというと、ある範囲の人びとが、同じことを考え、同じように行動するようにさせることです。これは、政府の命令でもないし、暴力による強制でもない。宗教を信じることで自然にそうなるのです。その結果、広い範囲で政治的まとまりをつくったり、社会的ネットワークを生み出したりすることが可能になります」(橋爪 2014: 196)。

すなわち、ラッシュが指摘する美 (aesthetic) や橋爪が指摘する宗教等の文化が、コミュニティの形成と維持の基盤一つつまり、ヒラリーの指摘する共通の絆一に位置づけられることは、今日でも不変であろう。そのため、こうした文化のもつ統合・規範的な役割に着目していくことが重要であろう。

2. 長崎のカトリック・コミュニティ

本稿では、上記の観点から、地域コミュニティの基盤として、宗教に着目していくことにしたい。具体的には、長崎のカトリック・コミュニティ (小教区, parish) を事例にして、共通の絆として宗教 (信仰) に焦点を当てる。各小教区を管轄する長崎大司教区の全信徒調査の結果を利用して、その基盤である宗教 (信仰) の特徴およびコミュニティ維持

の現状を明らかにし、地域を基盤とするコミュニティにおいて文化が果している役割について検討していきたい。

アンケート調査の実施概要

本論が利用する「長崎教区代表者会議（教区シノドス）に向けてのアンケート」（2011年に実施）は、第1に、教区シノドスの開催を前に信徒が長崎教区の現状について考え、小教区単位の分かち合いに参加するためのいわば覚書の役割と小教区単位の基礎資料の作成、第2に、アンケートに回答した信徒の現状認識と今後の方向性に対する評価を長崎教区本部が教区・地区レベルで集約し、教区シノドスに反映することを目的としたものである¹⁾。

アンケートの対象は長崎教区の20歳以上の全信徒で、長崎教区内の小教区を対象に1,9631票の配布されている。この配布数に対して信徒が小教区に提出した総受付数は9,274票で、回収率は47.2%であった。さらにシノドス事務局が点検し、調査対象外の20歳未満の年齢の調査票や白紙回答を無効票として除外した結果、有効調査票数は9,101票であった。

教区本部シノドス事務局は、調査実施の第2の目的に関して、各教会から返送されたアンケートの回答を整理・分析し、まず①長崎中・長崎南・長崎北・佐世保・平戸・上五島・下五島の7地区および修女連に区分してデータベース化し、さらに②9,000を超える有効回答の中から、約1,000のサンプルを無作為抽出法による抽出作業を行ない、世代や性別、

地区別等の社会的属性の相違に基づく分析を実施している²⁾。

質問項目と信徒の属性

まずアンケートの調査票の全項目は、表1の通りである。

次に、回答者（20歳以上）の属性を概略したい。性別は、教区の地区全体で男性36.8%、女性63.2%である。女性が回答者の3分の2弱を占めている。長崎大司教区現勢統計表（2010年12月31日現在）の長崎教区の全信徒（20歳未満を含む）の性別の比率（男性45.6%・女性54.4%）と比較すれば、男性の回答者の比率は約10ポイント少なく、女性の回答者の比率は10ポイント弱多くなっている。アンケートの回答率を宗教コミュニティへの参加の指標とすれば、女性の方がより多く参加していると考えられる。回答者の年齢別の比率は、20～30代7.9%、40～50代36.8%、60～70代46.2%、80代以上9.0%である。この数値から、20～30代が少なく、40～50代と60～70代が多く、世代が上がるとともに比率が高くなっている状況が判明する。また、既婚者に配偶者（夫・妻）の宗教を尋ねたところ、カトリック86.8%、他の宗教13.2%であった。さらに、年齢別の配偶者の宗教を見れば、カトリックの配偶者との結婚は、20～30代65.0%、40代～50代81.9%、60代～70代90.6%、80代以上98.5%で、世代が若くなるにつれてカトリック以外の宗教の配偶者との結婚の比率が高まる傾向が明らかである。

表1 長崎教区代表者会議（教区シノドス）に向けてのアンケート 質問項目（要旨）

属性	性別	年齢	結婚	配偶者の宗教	
I 家庭	1.	2.	3.	4.	2. 行事や活動に積極的に参加するよう努めていますか。
	2.	3.	4.	5.	3. 小教区の維持や施設のため金銭的協力を努めていますか。
	3.	4.	5.	6.	4. 小教区の活性化に必要なことは何だと思えますか。
	4.	5.	6.	7.	III 大司教区
	5.	6.	7.	8.	1. 大司教区の行事や運営に関心がありますか。
	6.	7.	8.	9.	2. 大司教の平和活動や社会的発言に関心がありますか。
	7.	8.	9.	10.	3. 教区司祭の高齢化に不安を感じますか。
	8.	9.	10.		4. 現在の神学生数に不安を感じますか。
	9.	10.			5. 小教区の統廃合などの必要性を感じていますか。
	10.				6. 信徒の要理教育者の養成の必要性を感じますか。
II 小教区	1.				7. 生体奉仕者の養成の必要性を感じますか。
					IV その他
					1. 隠れキリシタンの方と交流をもつよう努めていますか。
					2. ほかの宗教の方と親しく接するよう努めていますか。

本稿の構成

本稿では、表1のアンケート調査の項目のうち小教区の信徒の共通の絆である信仰と小教区の維持に関する6項目を利用して、コミュニティ（小教区）の基盤である宗教（信仰）および信徒のコミュニティの現状と社会的特徴の解明をめざす。

まず、第3節で、小教区に所属する信徒の信仰状況の把握をめざす。すなわち、信徒自身の信仰の状況に関して、I家庭の10. ミサに参加するよう努めていますか、信仰の継承に関してI家庭の4. 子どもの信仰や祈りの模範となるよう努めていますか、5. 要理教育をするよう努めていますか、の各質問の回答結果を検討していく。

次に、第4節で、コミュニティ（小教区）の状況の把握をめざす。すなわち、II小教区の1. 主日のミサは自分の小教区に参加するよう努めていますか、2. 行事や活動に積極的に参加するよう努めていますか、3. 小教区の維持や施設のため金銭的協力を努めていますか、の各質問の回答結果を検討していく。

最後の第5節で、長崎の小教区の信徒の共通の絆およびコミュニティ維持の社会的特徴を検討するとともに、コミュニティにおける共通の絆への再認識・再検討の必要性とそのコミュニティの維持に及ぼす影響に着目する必要性について議論していく。

3. 信徒の信仰状況

第1の課題である各小教区に所属する信徒コミュニティの共通の基盤である信仰に関して、その特徴と現状を見ていきたい。まず、信徒自身の信仰状況について、次に、信徒の文化といえる信仰の次世代への継承の状況について見ていく。

信徒自身の信仰状況

信徒自身の信仰の状況に関して、Iの10「ミサは家庭生活の力の源です。ミサに参加するよう努めていますか」という質問に対する回答を通して、その特徴を明らかにしていく。表2のように、「努めている」77.8%（修女連を含む数値78.0%、以下同）で、5分の4弱の信徒がミサに参加するよう努めている。一方、「努めていない」は22.2%（22.0%）

表2 ミサは家庭生活の力の源です。ミサに参加するよう努めていますか。

I 家庭 設問 10	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	80.5	19.5	100.0
長崎南地区	75.9	24.1	100.0
長崎北地区	73.6	26.4	100.0
佐世保地区	76.8	23.2	100.0
平戸地区	82.0	18.0	100.0
上五島地区	80.2	19.8	100.0
下五島地区	77.2	22.8	100.0
地区合計	77.8	22.2	100.0
修女連	98.2	1.8	100.0
全体数	78.0	22.0	100.0

注：数値は%
：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

で、信徒の5分の1強である。

地区別に見ると、「努めている」という回答は8割台が平戸地区（82.0%）、長崎中地区（80.5%）、上五島地区（80.2%）、7割台が下五島地区（77.2%）、佐世保地区（76.8%）、長崎南地区（75.9%）、長崎北地区（73.6%）の順である。

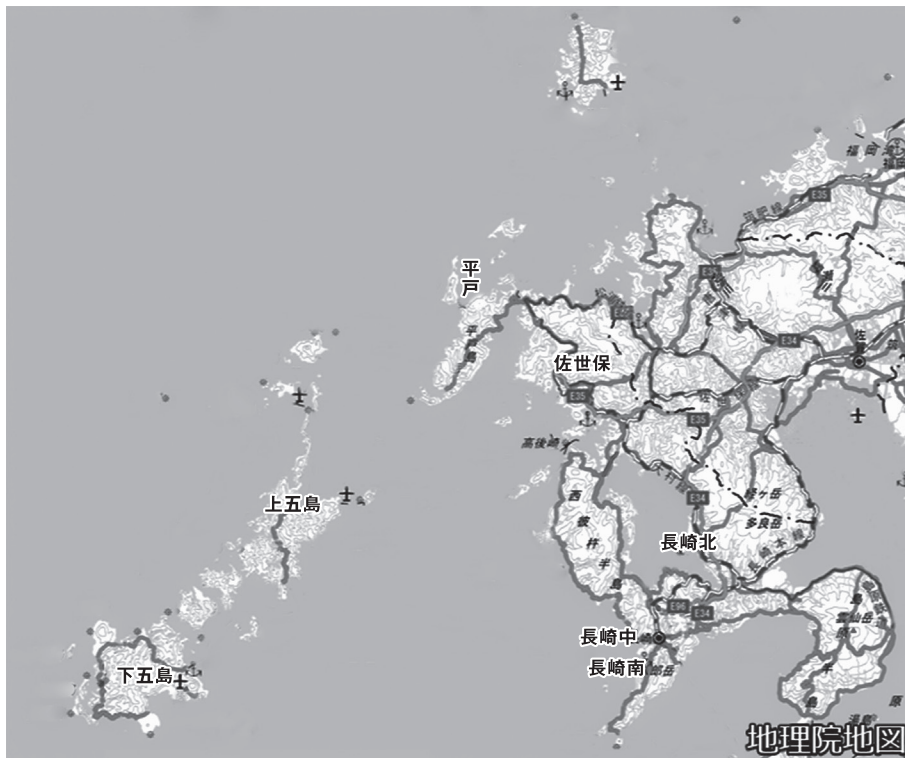
表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別で、男性78.5%、女性79.7%で、性別の相違はわずかである。年齢別で、20～30代59.0%、40～50代72.9%、60～70代86.4%、80代以上90.5%で、年齢が上昇するとともに「努めている」の比率が高くなる傾向が現れている。

①ミサへの参加状況

さらに、信徒のミサへの参加状況を地区別に見ていきたい。なお、長崎大司教区内の各地区は図1の通りである。

ミサに参加しているという回答が8割台の地区では、平戸地区の場合、主日のミサに参加しているという信徒、平日のミサに参加している信徒が多い。また、ミサに参加する理由について、信徒の努めや義務と考える信徒、ミサは神の恵み、糧、力の源泉、喜びと思っている信徒がいる。さらに、家族とともにミサ参加する信徒が多い。長崎中地区の場合、ミサに参加するよう努めている信徒の多くは、平日

図1 長崎県および大司教区の地区区分



長崎中地区	長崎市内（浦上地区等）
長崎南地区	長崎市内（中南部・島嶼）
長崎北地区	長崎市内（北部・東部）・長崎県央・島原半島等
佐世保地区	佐世保市等
平戸地区	平戸市・松浦市
上五島地区	新上五島町
下五島地区	五島市

のミサと主日のミサ、特別なミサと主日のミサ、主日のミサ、に参加している。ミサに参加する理由として、教会の掟や信徒の義務、信徒の様々な思い、があげられている。また、多くの信徒は、ミサへの参加を家族との関連でふれている。上五島地区の場合、主日のミサに参加している信徒に加えて、平日のミサに参加している信徒もいる。また、ミサへの参加の理由は、家族や自分の日ごろの思いを実現するため、信徒の務め、喜び、楽しみ、生活習慣、生活の糧、投げ所、である。さらに、家族とともにミサに参加している信徒もいる。

参加が7割台の地区では、下五島地区の場合、主日のミサに参加している信徒が多い。その中には、平日のミサにも参加している信徒がいる。また、ミサに参加する理由にあげられているのが、ミサが勤めであること、神の恵み・糧・投げ所、喜び、であ

る。佐世保地区の場合、主日のミサに参加しているという信徒が多い。また、平日のミサに参加している信徒もいる。ミサに参加する理由として、ミサが喜び・糧・投げ所、生活の一部・生活習慣、信徒の務め、努めと喜びが入り混じった思い、があげられている。また、ミサ参加は、家族でという信徒とともに、一人でという信徒もいる。長崎南地区の場合、主日のミサ、平日のミサに参加している多くの信徒がその理由にあげているのは、ミサが神の恵み、糧、投げ所、また、教会の掟や信徒の義務、習慣、信仰の継承、である。長崎北地区の場合、主日のミサに参加している信徒が多い。また、平日のミサに参加している信徒もいる。ミサに参加する理由として、ミサが信徒の務め、力の源、生活の習慣、安らぎ、等があげられている。多くの信徒は家族全員でミサに参加しているものの、家族員のミサ参加状況に相

違があるという信徒もいる。

②ミサに参加できない状況

一方、ミサに参加できない場合があるという信徒の回答に関して、その理由を見ていくことにしたい。参加できない場合があるという回答が2割台の地区では、長崎北地区の場合、その理由に、仕事や学校の活動、病気等の身体的問題をあげている。長崎南地区の場合、仕事や家事のためにミサに参加できない時があるという信徒もいる。他に、自分の病気、仕事とともに家族の教会離れがあげられている。佐世保地区の場合、自身の体調や子どもの部活等で参加できない時があることや、仕事や配偶者がカトリック信徒でないこと等の家族の事情があげられている。下五島地区の場合、病気等の身体的問題、仕事等があげられている。

参加できない場合があるという回答が1割台の地区では、上五島地区の場合、その理由に、家庭や仕事の事情、病気等の身体的問題があげられている。長崎中地区の場合、仕事や学校の活動、子育て、子どもの成長、病気等の身体的問題があげられている。平戸地区の場合、仕事等があげられている。

信仰の継承

次に、信徒の文化といえる信仰の次世代への継承の状況について把握したい。すなわち、表3のIの

表3 子どもたちの信仰や祈りの模範となるよう努めていますか。

I 家庭 設問4	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	62.4	37.6	100.0
長崎南地区	61.2	38.8	100.0
長崎北地区	57.6	42.4	100.0
佐世保地区	62.1	37.9	100.0
平戸地区	64.9	35.1	100.0
上五島地区	64.2	35.8	100.0
下五島地区	66.4	33.6	100.0
地区合計	62.2	37.8	100.0
修女連	98.1	1.9	100.0
全体数	62.4	37.6	100.0

注：数値は%

：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

4「子どもたちの信仰や祈りの模範となるよう努めていますか」という質問に対する回答および表4のIの5「子どもが神様の愛の中で生きていけるように、しっかりと要理教育をするよう努めていますか」という質問に対する回答を通して、その特徴を見ていきたい。

子どもたちの模範になっているか

Iの4「子どもたちの信仰や祈りの模範となるよう努めていますか」という質問に対する回答は、表3のように、「努めている」62.2%（修女連を含む数値62.4%、以下同）で、3分の2弱の信徒が子どもたちの信仰や祈りの模範になるように努めている。一方、「努めていない」は37.8%（37.6%）で、信徒の5分の2弱である

地区別に見ると、「努めている」という回答が6割台は7地区中6地区である。下五島地区（66.4%）、平戸地区（64.9%）、上五島地区（64.2%）、長崎中地区（62.4%）、佐世保地区（62.1%）長崎南地区（61.2%）の順である。5割台が長崎北地区（57.6%）である。

表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別で、男性62.1%、女性65.7%で、女性がわずかながら男性を上回っている。年齢別で、20～30代34.0%、40～50代52.5%、60～70代72.9%、80代以上93.8%で、年齢の上昇とともに「努めている」の比率が高まる傾向が見られる。

①どのような点で、模範になっているのか

さらに、信徒がどのように子どもたちの信仰や祈りの模範になっているのかについて、地区別に見ていきたい。

模範になるように努めているという回答が6割台の地区では、下五島地区の場合、子どもを誘ってミサに行く、ミサに行く姿、教会活動に取り組んでいる姿を子どもに見せること、家族と一緒に祈ること、家庭で祈ることである。また、子どもの模範となることをそれほど意識しなくても、日常の自分の生活態度や行動が子供の手本になっているという信徒もいる。さらに、実子以外の子どもの信仰の模範になっているという信徒もいる。また、信仰を次世代に継承させたいという思いの回答もあった。

平戸地区の場合、家族と一緒に祈っている、子ど

もが小さいときに一緒に祈っていたという信徒や家庭で祈ることで信仰の姿を子どもに見せている。また、子どもを誘ってミサに行く、教会活動に取り組んでいる姿を子どもに見せることで、子どもの手本になっているという信徒、別居等の子どもに信仰の話をする中で、信仰を子どもに繋ぎとめたい、継承させたいという信徒、日常の自分の生活態度や行動、信仰の姿が子供の手本になっているという信徒も多い。

上五島地区の場合、家族と一緒に祈っていることで、子どもや孫の手本になっているという信徒、家庭での祈りの姿を子供に見せることで模範になっているという信徒が多い。また、子どもや孫を誘ってミサに行く、ミサや教会活動に参加していることで、子どもの手本になっているという信徒、他出している子どもに会った時にミサや祈りの話をするという信徒がいる。さらに、子どもの模範になることをそれほど意識しなくても、日常の自分の生活態度や行動、信仰の姿が子供の手本になっているという思いの信徒もいる。

長崎中地区の場合、主として、実子や孫たちに家庭での祈り等の信仰の姿を見せること、日常生活での姿を見せること、ミサと一緒に往ったり教会活動に参加している宗教生活を見せることである。また、それほど積極的に模範を意識しなかったものの、信仰が継承されているという信徒もいる。さらに、少数であるものの、親戚や教会の子どもたちの模範になるように努めている信徒もいる。

佐世保地区の場合、信徒の多くが、家族と一緒に祈ること、家庭での祈りの姿、信仰の姿を子供に見せていることで子どもに信仰の模範を示している。また、子どもを誘ってミサに参加すること、自分がミサに参加することで、子どもに信仰を示している信徒もいる。子どもの信仰の模範になることをそれほど意識しなくても、日常の自分の生活態度や行動、信仰の姿が子供の手本になると思っている信徒もいる。加えて、子どもに信仰を伝えることで、信仰を子どもに継承させたいと思う信徒もいる。

長崎南地区の場合、子どもたちの信仰や祈りの模範になるように努めている信徒の多くが、家族とともに祈る、家庭で信仰の姿を見せる、日常の姿を見せることで模範を示す、ミサと一緒に往ったり教会活動に参加している姿を見させている。中には、自分

の子や孫以外の子どもたちの模範になるように努めている信徒もいる。

模範になるように努めているという回答が5割台の地区では、長崎北地区の場合、家族と一緒に祈っている、家庭で自分が祈る姿や信仰の姿を子供に見せる、子どもを誘ってミサに行く、教会活動に取り組んでいる姿を子どもに見せること、親がミサに参加していることをあげている。また、日々の生活における親の行動や言動、姿が子どもの信仰の模範になっているという信徒もいる。

②なぜ、模範になるように努めていないのか

一方、なぜ信徒が子どもたちの信仰や祈りの模範になれるように努めていないのかについて、その理由を見ていきたい。

模範になれるように努めていないという回答が4割台の地区では、長崎北地区の場合、信仰が深くないために家庭で祈らないこと、ミサに参加する程度であること、配偶者や家族がカトリック以外であるために子どもの信仰の模範になれないこと、子どもが成長するにつれて、自分の世界を持つようになり、教会離れをしていること、を理由にあげている。

模範になれていないという回答が3割台の地区では、長崎南地区の場合、祈りや信仰の模範になるように努めているものの、子どもや孫にその思いや努力が伝わらなかったり、自分の努力不足を実感したり、子どもに拒絶されている信徒もいる。また、模範になるように努めていないという信徒は、家庭で祈っていない状況、信仰の不安や問題、配偶者との信仰の違い、子どもの価値観や世界の尊重をあげている。佐世保地区の場合、家庭で子供に祈りの姿を見せていないこと、仕事、配偶者の宗教が異なること、子どもの部活等の家庭の事情、子どもの意思と自由の尊重をあげている。長崎中地区の場合、子どもや孫に対して祈りや信仰の模範になるように努めているものの、成長や独立を機に子どもが教会離れをしてしまったという信徒もいる。また、子どもや孫の信仰や祈りの手本になっていない状況や背景に、家庭で祈っていない状況、信仰がミサ参加にとどまっている状況、配偶者や子どもの配偶者が非信徒という家庭の諸事情があげられている。

上五島地区の場合、家庭での祈りの姿を見せていないこと、ミサに参加するだけであること、子ども

に信仰を伝えきれなかった家庭の事情があげられている。さらに、子どもが他出しているため、手本になれないという信徒もいる。平戸地区の場合、信仰がミサ参加にとどまっていることや、家族の教会離れ、家族がカトリック信徒でないこと、等の家族状況があげられている。下五島地区の場合、仕事等のために祈りの時間がないこと、ミサに参加できないこと、家族の信仰が異なっていたり、教会離れをしていること、子どもが成長するにつれて信仰から離れていること、信仰は子供に任せていることがあげられている。

要理教育に努めているか

Iの5「子どもが神様の愛の中で生きていけるように、しっかりと要理教育をするよう努めていますか」という質問に対する回答は、表4のように、「努めている」51.6%（修女連を含む数値51.8%、以下同）で、約半数の信徒が子どもの（公教）要理教育に努めている。一方、「努めていない」は48.4%（48.2%）で、ほぼ半数に及ぶ。

地区別に見ると、「努めている」という回答は5割台が上五島地区（57.3%）、佐世保地区（56.2%）、平戸地区（55.4%）、下五島地区（52.2%）、長崎中地区（51.9%）、4割台が長崎南地区（46.7%）、長崎北地区（45.7%）の順である。

表4 子どもが神様の愛の中で生きていけるように、しっかりと要理教育をするよう努めていますか。

I 家庭 設問5	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	51.9	48.1	100.0
長崎南地区	46.7	53.3	100.0
長崎北地区	45.7	54.3	100.0
佐世保地区	56.2	43.8	100.0
平戸地区	55.4	44.6	100.0
上五島地区	57.3	42.7	100.0
下五島地区	52.2	47.8	100.0
地区合計	51.6	48.4	100.0
修女連	89.8	10.2	100.0
全体数	51.8	48.2	100.0

注：数値は%

：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別で、男性50.4%、女性56.0%で、女性がやや男性を上回っている。年齢別で、20～30代45.3%、40～50代45.2%、60～70代58.0%、80代以上81.4%で、50代以下の年齢層と60代以上の年齢層で「努めている」の比率に差異が見られる。

①要理教育に努めている状況

さらに、信徒が子どもたちの要理教育に努めている状況を地区別に見ていきたい。

要理教育に努めているという回答が5割台の地区では、上五島地区の場合、教会での要理教育だけでなく、家庭でも要理教育や子どもの信仰教育に努めているという信徒、教会の要理教育を学ばせたり、教会行事に参加させている信徒がいる。また、成人して他出した子どもに信仰を守るように話をしている信徒もいる。佐世保地区の場合、家庭において要理教育に努めているという信徒、教会の要理教育を学ばせているという信徒がいる。また、子どもの要理教育に期待して、カトリック経営の学校に入学させている信徒もいる。平戸地区の場合、教会での要理教育だけでなく、家庭で要理教育に努めたという信徒、教会で要理教育を学ばせているという信徒がいる。また、子どもの要理教育の期待を込めて、カトリック経営の保育園に入学させている信徒、要理教育後の子どもに信仰を伝えている信徒もいる。下五島地区の場合、教会の要理教育を学ばせている信徒、子どもが成人になっても要理教育をしている信徒もいる。長崎中地区の場合、家庭において実子や孫に要理教育に努めていること、教会の要理教室に通わせたり自ら関わっていること、カトリック系の学校に進学させていることをその理由にあげている。

要理教育に努めているという回答が4割台の地区では、長崎南地区の場合、家庭において要理教育に努めたこと、教会の要理教育を学ばせたこと、カトリック経営の学校に通わせたことがあげられている。長崎北地区の場合、家庭において自分の子どもや孫の要理教育に努めたという信徒、教会で要理教育を学ばせているという信徒がいる。

②なぜ、要理教育に努めていないのか

一方、なぜ信徒が子どもたちの要理教育に努めていないのかについて、その理由を見ていきたい。

要理教育に努めていないという回答が5割台の地区では、長崎北地区の場合、子どもが成長にすに従って要理教育が難しくなったり、子どもが教会に行かなくなってしまったという信徒、結婚・独立した子どもや孫には、要理教育は難しいという信徒がいる。また、要理教育に努めていない半数以上の信徒は、教会や学校に任せていて自分で要理教育をしていないこと、仕事や家事で忙しいこと、経済状況のため、自分の知識が不足していること、家族と信仰が違うこと、家族が別居していること、子どもの思いに任せていることを理由にあげている。長崎南地区の場合、子どもが高校生になるあたりから要理教育が難しくなったり、子どもの教会離れが起こったという信徒がいる。加えて、自分の信仰が不十分であること、子どもの思いの尊重があげられている。

要理教育に努めていないという回答が4割台の地区では、長崎中地区の場合、要理教育の教えが成長した子どもや非カトリック信徒の配偶者と結婚した子どもの家族に届かなくなったという信徒もいる。加えて、教会や学校の要理教育に任せていたこと、自分自身に信仰や要理の知識が不足していることがあげられている。下五島地区の場合、子供が成長するにつれて、要理教育の教えが届かなくなったという信徒がいる。また、教会や学校に任せて、自分自身では要理教育をしていなかったこと、知識不足などの自分の信仰状況や子どもとの関係が良好でないこと、子どもの思いや成長した子供の意思に任せていることがあげられている。平戸地区の場合、子どもが成長するにつれて、教会と距離を持ち始めているという信徒、子どもが信仰に距離を持っているという信徒がいる。具体的には、教会や学校に任せていて自分自身では要理教育をしていなかったこと、自分の信仰状況や仕事等の都合、家族がカトリック以外であること、子どもの気持ちの重視等があげられている。

佐世保地区の場合、成人になった自分の子どもが他出したり、子どもが非信徒と結婚したため、要理教育の教えが子どもに届かなくなったという信徒がいる。具体的には、教会や学校に任せていて自分自身では要理教育をしていなかったこと、自分がまだ不十分で教えられるでないこと、子どもの思いや子供の意思に任せていることがあげられている。上五島地区の場合、教会や学校に任せていて、自分自

身では要理教育をしていなかったこと、自分自身の信仰や知識が不足しているという自分の問題、子どももさまざまであること、また、子供が成長した場合は、本人の意思に任せていることがあげられている。

以上の回答内容を通して、長崎の小教区に属している信徒の間の共通の絆である信仰の状況を明らかにしてきた。まず信徒自身の信仰に関して、その指標とすることができるミサへの参加の状況を見てきた。その結果、約5分の4の信徒がミサに参加していることが判明した。回答を見ると、主日（日曜日）のミサに加えて平日のミサに参加という回答も多く、また信徒の義務という回答以上に喜び、糧、力の源泉、神の恵み等の回答も多く、信徒の文化（信仰）の受容は、規範的である以上に積極的であることがうかがえる。また、文化の継承といえる信仰の次世代への継承に関して、子どもたちの手本になっている信徒が5分の3、要理教育に努めている信徒が半数であることが判明した。自身のミサ参加よりも少ない比率であるものの、子どものいない世帯、他出世帯等の存在を考慮に入れば、文化（信仰）の次世代への継承も自身の信仰と同様に強いものであるといえよう。

その一方で、こうした自身の信仰および次世代への信仰の継承に関して、信仰が阻害されている状況や継承できていない状況も明らかになった。すなわち、自身の信仰に関しては、仕事や病気、家族が未信者という状況の影響が見られ、信仰の継承に関しては、子どもの自由の尊重、家族が未信者であるた

表5 各質問における「努めている」の比率の地区間比較

	子どもの模範	要理教育	ミサ参加	合計	パーセンテージの合計
平戸地区	6	5	7	18	202.3
上五島地区	5	7	5	17	201.7
下五島地区	7	4	4	15	195.8
佐世保地区	3	6	3	12	195.1
長崎中地区	4	3	6	13	194.8
長崎南地区	2	2	2	6	183.9
長崎北地区	1	1	1	3	176.9

算出方法：各項目の「努めている」の数値を1位7点、2位6点……7位1点で計算した。

め世代間の継承が困難な状況も生じている。また、自身の信仰が教会のミサに限定されていること—文化の特定の生活領域へのセグメント化—の影響も語られている。

地区別では、表5のように、島嶼地区である平戸地区・上五島地区・下五島地区の数値が、都市地区を多く含む長崎中地区・長崎南地区・長崎北地区を上回っていて、コミュニティの絆である信仰およびコミュニティの存続に関係する信仰の継承に地域差があることが判明した。

4. 小教区の維持

次に、第2の課題である長崎の信徒が所属する宗教コミュニティ（parish）の維持に関する信徒の意識と行動およびその社会的特徴について明らかにしたい。まず、小教区に属する信徒の絆に係るⅡの1「主日のミサは自分の小教区に参加するよう努めていますか」を通して、小教区に関する信仰の状況を見ていく。次に、Ⅱの2「行事や活動に積極的に参加するよう努めていますか」およびⅡの3「小教区の維持や施設のため金銭的協力を勤めていますか」の回答結果を通して、小教区維持に関する信徒の意識と行動について見ていきたい。

表6 主日のミサはできるだけ自分の小教区で参加しようと努めていますか。

Ⅱ 小教区 設問1	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	84.7	15.3	100.0
長崎南地区	80.7	19.3	100.0
長崎北地区	79.6	20.4	100.0
佐世保地区	86.1	13.9	100.0
平戸地区	86.3	13.7	100.0
上五島地区	88.1	11.9	100.0
下五島地区	86.0	14.0	100.0
地区合計	83.9	16.1	100.0
修女連	89.0	11.0	100.0
全体数	84.0	16.0	100.0

注：数値は%

：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

所属する小教区のミサに参加しているか

Ⅱの1「主日のミサはできるだけ自分の小教区で参加しようと努めていますか」という質問に対する回答は、表6のように、「努めている」83.9%（修女連を含む数値84.0%、以下同）で、6分の5の信徒が自分の所属する小教区のミサに参加しようと努めている。一方、「努めていない」という回答は16.1%（16.0%）で、6分の1である。

地区別に見ると、7地区中6地区で「努めている」が8割台である。上五島地区（88.1%）、平戸地区（86.3%）、佐世保地区（86.1%）、下五島地区（86.0%）、長崎中地区（84.7%）、長崎南地区（80.7%）、7割台が長崎北地区（79.6%）の順である。

表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別で、男性83.3%、女性85.4%で、性別の相違はわずかである。年齢別で、20～30代66.7%、40～50代81.0%、60～70代89.9%、80代以上90.5%で、年齢の上昇とともに「努めている」の比率が高くなる傾向が現われている。

①小教区のミサに参加している状況

さらに、信徒が小教区のミサに参加している状況を地区別に見ていきたい。参加しているという回答が8割台の地区では、自分の小教区のミサに参加することは普通のこと、当然と思っている信徒が多い。上五島地区の場合、小教区の教会が地理的に近くにあること、小教区のミサへの参加が当然のこと、大事なこと、小教区の司祭の活動やミサの説教がいいこと、ミサでの子どもの奉仕活動のため、小教区のミサが信徒同士や聖職者との出会いや親交を温める場であることがあげられている。平戸地区の場合、所属する小教区のミサに参加することは当然のこと、大事なこと、自分が所属する小教区に愛着がある、大切にしたい、小教区のミサが信徒同士の親交を温める場であることがあげられている。佐世保地区の場合、自分が所属する小教区に愛着を感じる、大切にしたいという思い、小教区のミサが信徒同士や聖職者との出会いや親交を温める場であること、教会が情報を収集したり活動参加する場になっていることである。また、小教区の教会が地理的に近くにあるために小教区のミサに参加しているという信徒もいる。

下五島地区の場合、自分が所属する小教区に愛着

を感じる、大切にしたいという思いの信徒も多い。また、小教区のミサが信徒の親交を温める場であったり、教会の情報を収集したり、活動参加する場になっているという信徒もいる。さらに、小教区の教会が地理的に近いことを理由にあげる信徒もいる。長崎中地区の場合、大事なことだという意識、小教区に愛着や思いがあること、信徒同士のつながり、小教区が情報収集や活動の場になっていること、地理的近接性があげられている。長崎南地区の場合、信徒同士のつながり、小教区が情報収集や活動の場であること、小教区に愛着や思いがあることがあげられている。

参加しているという回答が7割台の長崎北地区の場合、自分の小教区のミサに参加することが普通のこと、信徒同士や聖職者との出会いや親交を温める場、小教区のミサへの参加が、当然、大事なこと、自分が所属する小教区に愛着がある、落ち着く、大切にしたいが、その理由としてあげられている。また、小教区の教会が地理的に近くにあるため、教会の情報を収集したり、活動に参加するためという信徒もいる。

②なぜ小教区のミサに参加するように努めていないのか

一方、なぜ信徒が小教区のミサに参加するように努めていないのかについて、その理由を見ていきたい。

小教区のミサに参加するように努めていないという回答が2割台の長崎北地区の場合、自分の所属する小教区の主日のミサに参加したいと思っているもの、どうしても主日のミサに参加したいという思い、他の小教区の状況を知りたいという思いで、他の小教区のミサに、時折、参加している信徒がいる。具体的な理由や状況として、実家の所属する教会や他出している子どもが所属している教会のミサに参加していること、ミサに参加できるならこの教会でもいいはずという思い、仕事のためにミサの時間が合わないことがあげられている。

小教区のミサに参加するように努めていないという回答が1割台の地区では、長崎南地区の場合、仕事等で、やむなく他の小教区のミサに参加している信徒、他の小教区の状況を知りたいと思っている信徒がいる。すなわち、小教区の教会の施設や駐車場の問題や他の教会が近いこと、高齢の家族の所属す

る教会や職場に近い教会に参加していること、小教区に関係なくミサに参加することが大事という思いがあげられている。長崎中地区の場合、家族の事情という信徒、どうしてもミサに参加したい思いの信徒、所属する小教区を「外」から眺めたり、他の教会の状況を知りたいという思いの信徒がいる。具体的には、ミサの時間が合わないこと、駐車場を含めた教会施設や移動手段の問題等があげられている。下五島地区の場合、仕事やミサはどこの小教区でも同じという思いがあげられている。

佐世保地区の場合、どうしてもミサに参加したいという思い、他の教会の状況を知りたいという思い、どの教会に参加してもいいはずという思い、家族の事情のために、必ずしも思い通りにならないという信徒がいる。すなわち、ミサの時間が合わないこと、実家の所属教会や配偶者の出身教会に参加していることがあげられている。平戸地区の場合、仕事等の関係で参加できないという信徒もいる。具体的には、自分が所属する小教区の主日のミサの時間が自分の生活時間に合わないこと、ミサ参加ならどこでもいいという思い、教会が遠いことがあげられている。上五島地区の場合、主日のミサに参加したいという思いから、仕事等の理由で別の教会に行く信徒、所属する小教区以外のミサに参加したいという思いの信徒がいる。他に、小教区に関係なく参加できるミサに参加したいという思いがあげられている。

小教区の行事や委員会に参加しているか

Ⅱの2「小教区の行事や委員会活動に積極的に参加しようと努めていますか」という質問に対する回答は、表7のように、「努めている」57.1%（修女連を含む数値57.4%、以下同）で、5分の3弱の信徒が自分の所属する小教区の行事や委員会活動に積極的に参加しようと努めている。一方、「努めていない」42.9%（42.6%）で、努めていないという信徒の5分の2強に及んでいる。

地区別に見ると、「努めている」という回答は6割台が平戸地区（66.0%）、上五島地区（63.4%）、佐世保地区（60.4%）、5割台が長崎中地区（57.1%）、下五島地区（54.3%）、長崎南地区（52.2%）長崎北地区（51.0%）の順である。

表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別で、

表7 小教区の行事や委員会活動に積極的に参加しようと努めていますか。

II 小教区 設問2	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	57.1	42.9	100.0
長崎南地区	52.2	47.8	100.0
長崎北地区	51.0	49.0	100.0
佐世保地区	60.4	39.6	100.0
平戸地区	66.0	34.0	100.0
上五島地区	63.4	36.6	100.0
下五島地区	54.3	45.7	100.0
地区合計	57.1	42.9	100.0
修女連	91.8	8.2	100.0
全体数	57.4	42.6	100.0

注：数値は%

：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

男性 55.7%、女性 55.4%で、性別の相違は見られない。年齢別で、20～30代 38.3%、40～50代 56.3%、60～70代 58.5%、80代以上 48.7%で、40代～50代と60代～70代の年齢層の「努めている」の比率が高くなっている。また、20～30代と80代以上を比較すると、80代以上が20～30代を上回っている。

①小教区の行事や委員会に参加している状況

さらに、信徒が小教区の行事や委員会に参加している状況を地区別に見ていきたい。参加しているという回答が6割台の地区では、平戸地区の場合、行事や委員会活動に参加している目的や意義は、教会の維持のため、役員への協力である。しかし、義務的になっているという信徒もいる。上五島地区の場合、小教区の維持のためがあげられている。また、互いに協力し合わなければ維持できないという実際的な理由も明らかにされている。佐世保地区の場合、教会共同体の維持のため、信徒の努め、責任感がその目的や意義としてあげられている。また、自発性を強調する信徒やかつて役員をしていた時の委員会活動や行事に参加していた経験を語る信徒がいる。

参加しているという回答が5割台の地区の場合、長崎中地区の場合、共同体の維持等のために行事や委員会活動に積極的に参加している。とりわけ多くの信徒が参加しているのが、バザーである。下五島

地区の場合、信徒が参加している委員会や活動に、信仰委員会、小教区の評議会、生涯養成委員会、典礼委員会、典礼奉仕、清掃活動等があげられている。また、行事や委員会等の活動にさまざまな程度で関わっている。さらに、行事や委員会活動に参加している目的や意義に関して、当然の活動、義務とともに、楽しみ、奉仕の精神があげられている。長崎南地区の場合、小教区の行事や委員会活動に参加している信徒は、委員会等の役員活動、アクション団体の活動、バザーなどの教会行事や委員会等の役員活動に従事している。また、その目的や意義として、信徒の務め、義務、共同体の一員があげられている。長崎北地区の場合、積極的に参加している多くの信徒が、委員会活動、典礼、清掃等をあげている。また、現在、行事や委員会活動に参加していないものの、今後参加したいという信徒もいる。

②なぜ小教区の行事や委員会に参加するように努めていないのか

一方、なぜ信徒が小教区の行事や委員会に参加するように努めていないのかについて、その理由を見ていきたい。

小教区の行事や委員会に参加するように努めていないという回答が4割台の地区では、長崎北地区の場合、その理由として、家族の事情や仕事に従事していること、年齢・身体・性格的理由、教会内の人間関係や雰囲気はあげられている。また、参加しているものの、積極的ではないという信徒もいる。長崎南地区の場合、小教区の行事や委員会活動に参加しているものの、輪番や当番で義務的に引き受けているという信徒がいる。努めていない理由として、家庭の事情や仕事の関係、年齢や身体的状況があげられている。下五島地区の場合、役職や当番についているものの、自ら望んで従事している訳でない、消極的という信徒がいる。努めていない理由としては、家族の事情や仕事に従事していること、年齢や身体的理由、信徒に親しみが持てないこと、いつものメンバーの中に新たに参加しにくいことがあげられている。長崎中地区の場合、役職や当番を担っているものの積極的でないこと、仕事との兼ね合いで積極的でない信徒がいる。具体的には、年齢的・身体的理由、教会の人間関係、家族の事情や仕事、があげられている。

小教区の行事や委員会に参加するように努めてい

ないという回答が3割台の地区では、佐世保地区の場合、役職や当番のために活動しているという信徒も多い。努めていない理由として、仕事に従事していること、年齢や身体的理由、教会の人間関係があげられている。上五島地区の場合、参加したいという思いはあるものの積極的になれない状況の信徒、参加したいと思っても教会内の人間関係のために行事等への参加できないという信徒、行事や活動に参加しているものの、高齢や仕事のために積極的ではないという信徒がいる。努めていない理由として、家族の事情や仕事に従事していること、年齢や身体的な事情があげられている。平戸地区の場合、仕事等のために積極的でない信徒がいる。他には、高齢や身体的理由、自分の性格のため、教会内の人間関係や雰囲気などがあげられている。

小教区に金銭的な協力をしているか

Ⅱの3「小教区の維持や施設のために、金銭的な協力を引き受けようと努めていますか」という質問に対する回答は、表8のように、「努めている」80.5%（修女連を含む数値80.5%、以下同）で、5分の4の信徒が自分の所属する小教区のために金銭的に協力をしようと努めていると回答している。一方、「努めていない」19.5%（19.5%）で、信徒の5分の1である。

表8 小教区の維持や施設のために、金銭的な協力を引き受けようと努めていますか。

Ⅱ 小教区 設問3	1. 努めている	2. 努めていない	合計
長崎中地区	83.2	16.8	100.0
長崎南地区	75.8	24.2	100.0
長崎北地区	77.7	22.3	100.0
佐世保地区	79.3	20.7	100.0
平戸地区	81.8	18.2	100.0
上五島地区	81.8	18.2	100.0
下五島地区	88.3	11.7	100.0
地区合計	80.5	19.5	100.0
修女連	78.5	21.5	100.0
全体数	80.5	19.5	100.0

注：数値は%

：表頭の1. 努めているは、アンケートの選択肢の「努めている」「努めているつもりだ」を合計したものである。2. 努めていないは、「努めていない」「まったく努めていない」を合計したものである。

地区別に見ると、「努めている」という回答は8割台が下五島地区（88.3%）、長崎中地区（83.2%）、平戸地区（81.8%）、上五島地区（81.8%）、7割台が佐世保地区（79.3%）、長崎北地区（77.7%）、長崎南地区（75.8%）の順である。

表示していないものの、サンプリングによるクロス集計の結果を見ると、「努めている」は、性別では男性79.9%、女性81.1%で、性別の相違は小さい。年齢別では20～30代60.0%、40～50代76.6%、60～70代84.2%、80代以上92.0%で、年齢が上昇するにつれて「努めている」の比率が高くなっている。

①小教区に金銭的協力をしている状況

さらに、信徒が小教区に金銭的協力をしている状況を地区別に見ていきたい。金銭的に協力しているという回答が8割台の地区では、下五島地区の場合、金銭的にできる限り協力しているという信徒や決められた額を出しているという信徒、年金から協力しているという高齢期の信徒がいる。また、金銭的に協力している費目として、教会維持費、教区費、修理費、募金、建設資金があげられている。協力の理由として、信徒の義務という思い、小教区を維持発展させるために協力しているという思いがあげられている。加えて、小教区の経済的状況に不安を抱いている信徒もいる。長崎中地区の場合、多くの信徒ができる限り、できる範囲で小教区に金銭的に協力しようとしている。また、信徒として当然と考えている信徒が多く、維持費や献金、募金、等で協力している。金銭的協力の理由として、当然という思いや小教区や信仰を支える思い、があげられている。

平戸地区の場合、金銭的協力を第一に考えている信徒とともに、生活を第一に考えて金銭的協力をしている信徒がいる。また、金銭的に協力している費目は、維持費等である。その理由として、信徒として当然という信徒が多い。上五島地区の場合、金銭的に協力している費目は、維持費、教会建築積立費、寄付等である。小教区の維持費が定額制であるという信徒がいる。また、小教区を維持・運営していく強い思い、信徒として当然という思いが金銭的協力の理由としてあげられている。

金銭的に協力しているという回答が7割台の地区では、佐世保地区の場合、多くの信徒が、維持費等に関して、できる範囲で、できる限りで努めている。

金銭的協力の理由として、信徒の務めという思い、積極的に協力したいという思いがあげられている。長崎北地区の場合、信徒の多くが、できる範囲、できる限りで金銭的に協力している。同時に、厳しい生活の中で金銭的に協力している状況も明らかにされている。また、金銭的に協力している費目として維持費等があげられている。金銭的に協力する理由として、小教区の維持や施設のため、信徒として教会を支えるという思いがあげられている。長崎南地区の場合、維持費等の費目や献金や寄付、等で金銭的に協力している。また、できる限り、できる範囲という信徒が多いとともに生活の厳しい中で金銭的協力をしている信徒もいる。金銭的協力の理由として、信徒として当然という思い、教区や教会の維持の気持ち、活動協力の代わりに金銭的協力があげられている。

②なぜ小教区に金銭的協力をするように努めていないのか

一方、なぜ信徒が小教区に金銭的協力をするように努めていないのかについて、その理由を見ていきたい。

小教区に金銭的協力をするように努めていないという回答が2割台の地区では、長崎南地区の場合、その理由として、厳しい経済的状況や高齢者の負担があげられている。また、振込等の方法を提案する信徒がいる。長崎北地区の場合、経済的に厳しいことがあげられている。佐世保地区の場合、その理由に、負担感、家庭の経済的状況があげられている。

小教区に金銭的協力をするように努めていないという回答が1割台の地区では、上五島地区の場合、金銭的協りに負担感があること、金銭的に協力することが難しい経済状況が理由にあげられている。平戸地区の場合、金銭的な協力の額が十分でないこと、協力することが難しいことがあげられている。長崎中地区の場合、金銭的に協力したい思いはあるものの、経済的理由等から負担感を訴える信徒がいる。下五島地区の場合、経済的な負担感が大きいことがあげられている。

以上の回答を通して、長崎の小教区に属している信徒のコミュニティ（小教区）の維持の状況が明らかになった。

まず小教区に対する信徒の小教区に関する意識に

表9 ミサに参加と小教区にミサに参加

I 家庭 設問 10	ミサに参加	小教区のミサに参加
長崎中地区	80.5	84.7
長崎南地区	75.9	80.7
長崎北地区	73.6	79.6
佐世保地区	76.8	86.1
平戸地区	82.0	86.3
上五島地区	80.2	88.1
下五島地区	77.2	86.0
地区合計	77.8	83.9
修女連	98.2	89.0
全体数	78.0	84.0

注：数値は％
：いずれの数値も表2および表6の1. 努めているの数値である。

関して、その指標とすることのできる所属する小教区のミサへの参加の状況を見てきた。すなわち、5分の4強の信徒が小教区のミサに参加しようと努めていることが判明した。信徒の回答から、自分の小教区のミサに参加することが、普通・当然のことと思っている信徒が多いことが分かる。実際、表2および表6の回答を比較した表9から明らかなように、自分の所属する小教区のミサに参加したいという強い思いがうかがえる。すなわち、信徒の間では一定の地理的範囲に区分された小教区であるが、所属する小教区に対する強い思いや愛着が存在していることが明白である。こうした小教区に愛着を感じている信徒の回答が非常に多いことに加えて、小教区のミサが信徒間および聖職者との交流や情報収集の場になっているという回答が多いことから、小教区は、信徒にとって、信徒間に強い絆が抱かせるとともに、信徒間および信徒と聖職者の間に社会的相互作用を生じさせる場になっているといえよう。

また、小教区の維持に関する具体的な活動に関して、その指標とすることができるのが、小教区の行事や委員会への参加の状況および金銭的な協力である。

このうち、小教区の行事や委員会への出席に努めているという回答は5分の3弱で、小教区のミサへの参加を2割程度下回るものの、かなり高い比率といえよう。多くの信徒が小教区の維持のためと考えているとともに、それが信徒および共同体の一員と

表 10 小教区の各質問の地区間比較

	小教区の ミサ参加	行事・委 員会参加	金銭的協力	合計	パーセン テージの合計
平戸地区	6	7	5	18	234.1
上五島地区	7	6	5	18	233.3
下五島地区	4	3	7	14	228.6
佐世保地区	5	5	3	13	225.8
長崎中地区	3	4	6	13	225.0
長崎南地区	2	2	1	5	208.6
長崎北地区	1	1	2	4	208.3

算出方法：各項目の「努めている」の数値を1位7点、2位6点……7位1点で計算した。

しての務めや義務に由来していることが明らかである。

また、小教区に金銭的協力をしている回答は5分の4で、小教区のミサへの参加とほぼ同数であった。金銭的協力の多くは小教区の維持費の支払いである。また、信徒として当然とする回答が多く見られた。

その一方で、小教区に対する思いや愛着、維持に関する活動や協力に関して、それが阻害される状況も判明した。すなわち、小教区への意識に関しては、小教区にこだわることなく主日のミサに参加したい思いが信徒の間に存在していることが分かる。また、家族（実家・他出の子ども）の状況や仕事の影響が語られている。また、教会の維持に関する活動に関して、参加しているものの義務的・消極的という信徒が多い。活動できない理由として、自身の身体的・年齢的状況や性格、家族・仕事の事情があげられている。加えて、教会内の人間関係も理由とされている。金銭的協力に関しては、世帯の経済的状況や高齢であること、負担感が阻害の理由にあげられている。

地区別では、表10のように、島嶼部である平戸地区・上五島地区・下五島地区の数値が、都市部を多く含む長崎中地区・長崎南地区・長崎北地区を上回っている。そのため、コミュニティに対する信徒の意識およびコミュニティの維持に対する対応に地域差が存在することがうかがえよう。

5. 信徒の間の共通の絆とコミュニティの維持

最後に、「長崎教区代表者会議（教区シノドス）

に向けてのアンケート」の結果を通して、明らかになった小教区の信徒の共通の絆およびコミュニティ維持の社会的特徴を検討したい。その上で、コミュニティにおける共通の絆に対する再認識・再検討の必要性について議論していく。

長崎の信徒の間の共通の絆とコミュニティ維持の社会的特徴

長崎のカトリック信徒の間の共通の絆に関して、ミサおよび小教区のミサへの参加の状況を指標にして、まず信徒自身の信仰の状況の把握をめざした。すなわち、大半の信徒のミサ参加の状況、とりわけ小教区のミサに参加するよう努めている状況から、長崎の信徒の間にカトリック信仰がコアな精神文化として共有され、それに基づく小教区への強い絆が存在することが確認できたといえよう。同時に、小教区以外のミサにも参加という状況も語られ、カトリック信仰の中に、地域性と普遍性が共存していることが興味深いといえよう。また、信仰の継承に関して、自身が従っているコアな精神文化を次世代と共有したい思い、すなわち信仰を継承させたいという思いと行動があることを知ることができた。

次に、小教区の維持に関する回答を通して、信徒にとって基層的な位置にある文化（信仰）が、さらにコミュニティ（小教区維持）に関する諸活動に結実している状況が判明した。

同時に、カトリック信仰に由来する信徒の間の共通の絆が、長崎大司教区内の地区の間で差異が見られる点も明らかになった。それは、島嶼と都市に関して地域性が顕れていることである。こうした地域性の背景に着眼する必要があるように思える。すな

わち、信徒の間には、信仰という共通の絆に加えて、さらに職業的同一性というもう一つの共通の絆が関係していると推測されるからである。具体的には、島嶼部では、信徒世帯の間に農業や漁業等の同業的關係が残存する傾向が見られるため、信仰と同業關係が重層する共通の絆の影響が想定されるからである。一方、都市部では、信徒間に職業的多様性が見られ、共通の絆が信仰のみにとどまっているとともに、小教区における信徒割合が低く、絆が弱化する傾向にあることが影響しているように思われるからである。

共通の絆の再認識・再検討の必要性

ヒラリーが指摘したコミュニティの3つの要素のうち、今日、議論になっているのは領域性についてである。その一方、共通の絆については、日本では十分に議論されていなかった。

しかし、従来の地理的領域にとらわれない新しいコミュニティ概念が提示されたことで、結果的に、下位文化等、成員間の共通の絆に焦点が向けられるようになったともいえよう。

もちろん、こうした共通の絆は、当然ながら、新しいコミュニティに限定されるものでない。本稿の事例から明らかなように、ヒラリーが指摘したように地域コミュニティにおいても基盤的なものである。そのため、地域コミュニティの成員の間の共通の絆、さらにその基盤である文化の内容と成員の間におけるその共有が、コミュニティの維持と成員間の関係性に影響するという点に目を向ける必要があるように思われる。具体的には、ラッシュが指摘する新たな類縁関係とともに、神社等の存在や祭り等の行事が果たしてきた役割や同様の文化、職業的同一性等の果たしてきた役割についても、コミュニテ

ィ研究の観点から再検討すること、こうした関連から、成員間の文化の共有の状況の変化や職業的多様性の広がりについて検討を加える必要があるように思われる。

[注]

- 1) 教区シノドスについては、叶堂・加来（2018年）参照のこと。
- 2) 叶堂・加来は、2012年～2013年に本アンケート（サンプル調査を含む）の分析作業に従事している。

[文献]

- Beck U., A.Giddens and S.Lash, 1994,*Reflexive Modernization: Politics and Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』而立書房.)
- ドーア, R.P., 1962,『都市の日本人』(青井和夫・塚本哲人訳) 岩波書店.
- Fischer, C. S.,1982,*To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago: University of Chicago Press. (=2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)
- 橋爪大三郎, 2014,『面白くて眠れなくなる社会学』PHPエディターズ・グループ.
- Hillery, G. A.,1955," Definitions of Community: Areas of agreement," *Rural Sociology*, 20(2), 111-23. (=1978, 山口弘光訳「コミュニティの定義」鈴木広編『都市化の社会学(増補版)』誠信書房, 303-21.)
- 叶堂隆三・加来和典, 2018,「カトリック長崎司教区におけるシノドス」『社会分析』日本社会分析学会, 45, 95-114.
- 町村敬志, 2017,「コミュニティは地域の基盤を必要とするのか」『学術の動向』日本学術共同財団, 22(9), 32-5.